

専攻医
の主張

産婦人科医2年目を終えるにあたって

広島大学病院 産婦人科 宮原 新

まだまだ寒い日は続くが、暦の上では春を迎えた。研修医を含めて医師4年目、産婦人科医2年目をもうすぐ終えるところで振り返りをしてみようと思う。産婦人科は周産期、腫瘍、生殖、女性のヘルスケアと大きく4つの分野に分かれる。周産期は妊娠の管理から生命の誕生、時には死産や中絶にも携わる。腫瘍は婦人科がんに対して手術療法、化学療法、放射線療法で立ち向かう。生殖はさまざまな技術を駆使して不妊に困っている患者さんのサポートをする。女性ヘルスケアは月経に伴う症状や更年期症状など全世代の女性のQOLの向上に寄与する。こうして女性の一生を幅広く、人間誰しにも関係する生と死に携わることができる産婦人科という診療科に魅力を感じ、産婦人科医という道を選択した。あとは私が趣味でピアノを弾いていたこともあり、ドラマ「コウノドリ」への憧れも少し影響している。最近はあまり弾けていないので、来年度の目標の一つとして、途中で諦めたベートーヴェンの「月光第3楽章」を完成させようと思う。

産婦人科医として研修を始めて2年が経過した。産婦人科医1年目は市中病院で手術、分娩、外来、当直を経験し、全てが初めてで圧倒され、あっという間の1年であった。2年目は大学病院で合併症の多い症例や難しい手術を経験し、1年目とは別世界のように感じた。また、両病院で研修したことで産婦人科ならではの母体搬送

も搬送する側、搬送される側を経験し、搬送するタイミングや搬送時の対応など多方向から学べた。どちらの病院も意味合いは多少異なるが圧倒されながらも、新たな発見と学びが多く充実した研修であった。実際の臨床現場では教科書の知識だけでは対応できない場面が特に産科分野で多く感じた。分娩は短期間に子宮口が全開大し、児が狭い産道をくぐり抜けて出産となる人体において最もダイナミックな過程であるが、一人一人の体格が違いうように全く同じ分娩はない。例えば、分娩進行中に医学的な介入(陣痛促進、急速遂娩など)をいつするか、診療ガイドラインにはおおまかなルールのみ記載されているが、実際にはそれぞれの症例に合わせてダイナミックに変化する中での確かな判断をするには数多くの経験が必要だと感じた。私自身は1年半後に専門医試験が待ち受けている勉強中の身だが、まずは教科書の知識をベースにこのようにより多くの経験をし、そこで得た知識を上乗せし、エビデンスに沿った医療を提供できるように目指したい。また、産婦人科は神秘的な分野であるが故に未知な部分も多く、エビデンスが確立していないことも多い。将来的には「エビデンスがないからと諦めるのではなく、エビデンスは作り出すものだ」と後輩に言えるように、今は広い視野を持ちつつ、目の前のことを一つずつこなしていきたい。

厚生労働省版

禁煙支援マニュアル (第二版) 増補改訂版

厚生労働省(健康局健康課)において、禁煙支援マニュアル(第二版)増補改訂版がとりまとめられました。日常の禁煙指導にお役立てください。

なお、内容は厚生労働省ホームページ「たばこと健康に関する情報ページ」で閲覧することができます。

◆禁煙支援マニュアル

URL <https://www.mhlw.go.jp/topics/tobacco/kin-en-sien/>